巻頭言

# 人体的有機都市と軌道交通

## ～ゆいレール開通に思う～

琉球大学名誉教授・
沖縄地方交通審議会委員
上間　清

複数の要素から構成され、これら要素間に相互関係があり、全体で達成すべき目標を有する複合体――いきなりこむづかしい文句を述べたが、ご存じ、システム（体系）の定義である。昨今、この言葉、さまざまな意味内容でさまざまな場合に日常茶飯に使われている。システム工学、システムズアナリシス、システムエンジニアなどは、工学の教科書に頻出する、定義相当のオーソドックスなものであり、また、システムキッチン、システムカメラなども一応納得がゆく。が、居酒屋へ立寄り勝手に席をとると店員がやってきて「当店のシステムがありますので」などと言われ隅の席を指定される時などは面喰らい、面白くもない。しかしながら、人体、家庭、集落、都市、行政機関、国家、宇宙など、われわれがこの世界に見聞・感知するあらゆる実体や概念に共通するものは何かと問われれば、システムとするのが妥当のようである。森羅万象、システムの中にある。閑話休題。

このたび那覇市に、一九四五年の戦災壊滅の沖縄県営鉄道以来、五十八年ぶりの軌道系交通としての沖縄都市モノレール（愛称・ゆいレール）が、祝賀喧騒のなか八月十日開通した。計画から今日まで、三十年の異常に長い時間が経過し、早期実現期待の県民の「待ち」もそろそろその極にあったが、愈々、ゆいレール開通のときを迎え、沖縄の戦後交通史の公共交通の章に新たなページを加えたことは、まさに沖縄の快哉事である。

さて、システムと言えば、いろいろの自然システムのなかで、最も身近で最高度に完成されたシステムは人体であろう。都市を人体に擬して考えると、都市の理想のあり方やかたちがきわめて明快にイメージできる。人体は生き、成長する目的を持って、骨格と筋肉系からなる完全構造体の中に心臓・腎臓・肝臓などの臓器や脳を適正配置、収納し、これらを血管・神経系統で結合して有機的な全き関係性を形成している。この構成や働きの妙は驚嘆である。血管・神経システムは都市で言えば交通・通信体系である。人体の大動脈、つまり都市の幹線道路に渋滞コレステロールや危険誘発活性酸素が蓄積しては、都市システムの維持に重大な支障を来す。那覇都市圏の幹線道路の交通渋滞は、その軽減策の積年の展開にもかかわらず、依然として課題は消えていない。

都市交通を支える主体が、道路交通であり続けることは、二十一世紀を通して予想されるが、その結果としてもたらされる渋滞や環境への負荷などを軽減し、省エネルギー化に努め、人々の暮らしや都市の健全な存続を図るには、やはり、人流・物流を定時安定的、また、大量効率的に輸送可能な、大動脈相当の軸となる軌道系公共交通システムの導入は欠かせない。那覇市を人体有機都市論的にみるとき、今般のゆいレールの導入は、那覇都市圏に欠落していた大動脈の第一次移植手術の成功と評すべきであろうと考えたい。第一次であるから二次、三次の移植手術がなくては、大動脈移植は未完と言うことになる。私が期待する未来の軌道系の移植手術メニューには、「石嶺・宜野湾」、「中部都市圏」、「糸満都市域」、「那覇環状」という名の幹動脈系がある。

さて、都市化の時代、交通課題は愈々深刻化する。全国に「交通名医」を配し、交通行政における即応施策、その用意おさおさ怠りなきよう、期待申し上げる次第である。

＊　＊　＊